

巻頭言「バーチャル出版とは何か―教員の立場から―」

中村祐司

今回バーチャル出版を行ったのは初めてではない。

学生のレポートをそのまま本にするにはハードルが高過ぎるので、報告書の冊子のような形式で成果を残すというやり方もあるだろう。大抵の授業成果はそれ自体、何か「形」としては残るわけではなく、その意味では「空気」として終わるものがほとんどであろうから、「形」に至る手間がかかった分だけ意義がプラスされることになる。

ところが、残念なことに紙媒体のみでは、出版の流通ルートに乗るわけではないので、せっかくの成果の共有にはどうしても限界が生じる。大量の部数を印刷したとしても、それを配布するのに手間が掛かるし、配布先も限定しなければならない。ストックしておくのも大変だ。どうしても内輪の世界で終わってしまうのである。

そこで、「地方自治論」（学部専門科目）と「現代政治の理論と実際」（基盤教育科目）において試みたように、インターネットの利用に踏み切ることになる。不特定多数の授業外、さらにはキャンパス外の社会的空間に公表するのに最も便利なのがネットだからである。HPスタイルであれば、欲してもいないのに個々のSNSユーザーに情報が飛び込んでいくことはない。HP (html) の場合、閲覧にはあくまでもネット接続者の主体性が維持される。

SNS と比べて速効性や普及・浸透・共有性、さらには簡易性で劣るにしても、HP は相対的に謙虚な情報発信空間なのである。むしろ、バーチャル出版のような手間暇掛けた成果品の「刊行」は、作業としては紙媒体のそれに近いものがある。簡単に掲載という訳にはいかないのである。

それでは、バーチャル出版企画は授業成果の表示として万能なのであるだろうか。そうとも言い切れない。この用語は、「バーチャル」という一見軽やかな用語と、編集労力の掛かる「出版」とを合致させていること自体に無理があるのではないか。もちろん成果は共著を担う個々の執筆者（受講生）の意欲と力量次第である。しかしそれだけではない編集という重い仕事が待ち構えている。編集は、本来この道でのプロフェッショナルが求められる忍耐と根気のいる仕事である。

自分の単著を編集するのであれば嫌々でも腹を括って向き合うだろう。ところが、執筆者（受講生）と編者（教員）が異なるとなると、もはや編集の仕事はよほどの強い意思がなければ向き合えなくなる。教員としてこの重要な課題に今後どう向き合っていけばいいのだろうか。

とくにここ数年はバーチャル出版の他の難しさに直面するようになった。個々の執筆者を实名にするか匿名にするかという課題である。どちらが良いとか悪いとかではないし、執筆者の考えを最大限に尊重すべきであることが大前提である。しかし、HP 掲載に向けて、匿名希望者を対象にレポート上の名前の削除とファイル名の変更作業を行っている際に強く感じたことがある。どうしてもレポートそのものの根幹というのか魂というのか、ある

いは息づかいのようなものが軽減されてしまうのだ。実名であることの堂々感あるいは潔さの効力というには、思いの外大きいのもかもしれない。今後も学生と接する中で考え続けていきたい。

今回、バーチャル出版に向け Moodle を利用したのは初めての試みであった。このやり方には大きな収穫があった。期せずして、出版に至るまでの Moodle 上のファイルが極めて適切な「緩衝作業地帯」となったのである。学生から出されたファイルを受け取り、これをいきなり HP 上に掲載することの無理はこれまで長年感じていたのだが、まさか Moodle が受講生作成のファイルと HP 掲載の「つなぎ役」をこれほど果たしてくれるとは。

出版界では年々電子書籍の伸張と紙媒体書籍の低減が顕著だという。書籍の場合には「電子か紙か」ではなく、「電子も紙も」で推移していくのだろう。しかし、学生作成のレポートはどうなのだろうか。教育的見地と成果公表の見地から、どのように位置づければいいのか。この課題についてもこれからの授業の中で問い続けていきたい。